
六角一家

神山夏彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六角一家

【Nコード】

N0864N

【作者名】

神山夏彦

【あらすじ】

頭が潰れたトマト的な事になって死んだ主人公は、冥界の神ハデスに気に入られてぬらりひよんの孫の世界へ！外見は孔雀王のササノオでチートで好きに生きます！チートとか嫌いな方はご注意ください！

プロローグ（前書き）

二つ目の投稿です。無性に書きたくなったので書きます！

ブローグ

さあさあ皆さんよく聞いて！

ドーン！

キュルキュルキュルドグシャアツ！

はい！死にました！普通に道を歩いていたら後ろからいきなりバスにはねられて、勢いよく回転しながら頭から落ちて潰れたトマト的な事に……！

んで今は良くわからない真っ黒な空間にいるわけだが……何だか他人事みたいな感じですよまったく。一部始終をくつきりめつきり覚えてるからね。痛みを感じなかったのは幸いか……。

「そろそろいいか？」

感傷に浸っているとこの真っ黒な空間の何処からか声が聞こえた。つて誰ですかっ！？

「ああ、そんなに固くならないで。さっ、粗茶ですが」

あ、ども。

……じゃなくてっ！

「おお、ナイスツツコミだ！流石はあんな変な死に方をしたただけはある！」

やっぱり変だったのか……まあもう死んじやったんだからどうしようもないんだがな！。

「まあまあそう落ち込むなって。俺が肉体作って違う世界に送ってあげるからさあ」

まっマジですか！？誰だか知らないけどありがとう！

「おうともよ！冥界の神たるこのハデス様の手にかかれば簡単だ！」

……ハデス様！？ちよっ！？マジですかい！？

「マジだマジだ大マジだ。いやさ？近年稀に見る面白い死に方した

からさ。ちょっとどんな奴かと思ってよ、連れてきたんだわ」

うわゝ、なんてテンプレ。これでチートで漫画とかの世界なら二次創作小説まんまだな。

「もとよりそのつもりだが何か？」

向こうに行ったら信者として祠たてて祀らせて頂きます！

「アハハ！面白いなお前！よし、容姿から何までドンとこい！ちなみに行く世界はぬらりひょんの孫な！最近ハマってよお」

あ、俺もです。

ふむう、ならそれに準ずる力が欲しいな……妖怪、というかチートするなら俺スサノオになりたいです！見た目は孔雀王のまんま六角牛王で！あ、でも人型にも任意でなれるようにしてください！

「おお、思い切ったなあ。まさか神の一柱になりたがるとは思わなかったぞ？」

いえ、神様になりたいわけではないのであくまでも妖怪というく

りにしといて下さい。

「りょーかい。んじゃ人間時の基本的な容姿は180cmオーバーの黒髪イケメンにしといてやるぜ！んで軽く土蜘蛛より強いだろ？あと人間時の外見的年齢は任意で変えられるようにしといてやるう！そして核爆弾位なら軽く耐えられるから、死にたくなったら自分で心臓抉り出せ。好きに生きろ」

ハデス様！最高です！そこに痺れる憧れるううう！！

「よせよ照れるぜ。んでお前の畏は俺的にはスタンドみたいなデカイお前の腕とかが出るのでもいいか？」

仰せのままにつ！

「おう。あとは……夜の方の技術を天才的にしてやるう。他に何かいるか？」

最後のは……いりますね、ハイ。ここまでで既にチートですが、治癒術使える様にするのと、妖刀や魔剣の類いに好かれる体質にしてみられます？

「構わんよ。回復は人間妖怪両方共やべえ位出きるようにしよう。妖刀の方は必然的に妖怪共が寄ってくるが……まあ頑張れ」

ありがとうございます！あとは、あれっすね。原作開始より結構前にいたいですね。

「分かった。なら……あれだな。平安時代辺りにしとこうか。いろいろと不便だが、とにかく頑張れ」

はい！立派な妖怪になります！

「おお！向こうの神達には言つとくから、スサノオについては気にするなよ！俺はここで見てるから、好き勝手暴れてこい！」

そのハデス様の言葉を最後に、俺はそこから消えた。

プロローグ（後書き）

衝動的に一気に書いた……これからどう繋げようか。

第一話（前書き）

初めなので短いです。

第一話

何だかストン、と身体に魂？が入った感覚の後に目をゆっくり開ける。そして周りを見渡せば雪だらけで一面木、木、木、木、木、どうやら今いるのは冬の森のようだ。んで何故か寒くない。

「何故に冬に……ん？これは？」

疑問を口に出しながら視線をずらすと、足元にある手紙と見たことのある刀が目に入る。

「えっと、ああハデス様からか……なにになに？」

くハデスく

この手紙を読んでいるということとはちゃんと身体に入ることが出来たんだな。まあ俺様がやったんだから確実なんだがな！

で、お前の足元にある刀は俺からの餞別だ。つつつても見たことがあるだろう？そう、鬼武者に出てくる雷斬刀だ。倉庫の整理してたら出てきたからお前にやろう。そいつはまだ初期の初期だが、何でもいいから血を吸わせれば成長するぞ。

それと勿論鬼戦術も成長度によって違うが使えるからな。お前の妖気を吸って行うが、ぶっちゃけチートだから無くならん。心配すんなよ。

他にも鬼武者シリーズが日本各地に眠ってるから探したければ探せ。お前以外には使えんから取られるとかはないから安心して探すといい。今お前がいるのは東北地方のどっかだ。

刀は念じれば出し入れ出来るからな。まあ頑張れ（笑）

P・S・容姿がDODのカイムに（笑）あと手紙見終えたら燃えるから

「おお………なんというか、ハデス様遊びすぎじゃね？」

手紙が燃えていくのを見ながら雷斬刀を拾う。うーむ、まさか本物を自分で持つ日が来るとは………それに鬼武者シリーズがあるとかさ。ヤバくね？

「それにしても、スサノオなのにカイムかよ」

いや、確かに黒髪イケメンだがさ。俺今黒の着物に羽織をかけて下駄はいてんだわ。何でこうなった？

「……まあ誰も答えちゃくれないし、自分で何とかするしかないか」

そう！自棄になってる暇があったら能力確認だ！プラスに考えてこう！

さあて、この身体はどんな感じなのかな？

第一話（後書き）

鬼武者からDOD……いろいろと取りすぎたかな？

第二話

とりあえず能力を確認すると決めた俺は立ったまま目を瞑る。まずはハデス様の手紙に書いてあった多分自身の中にあるだろう妖気というのを探ってみる。

すると大体心臓の辺りから黒い煙の様なものを発見。手繰り寄せるように引きずり出してみる。

「うおっ!？」

すると箍が外れたのか、一気に身体から某野菜人の気の如く出てくる俺のどす黒い妖気。正直やばいです。なんか雪が一気に溶けました。俺を中心に半径十メートル位が炭だらけ……。

「えっと……ふんっ!」

このままにしていたら大変な事になりそうなのは目に見えてるので、気合いと共に妖気を最初位まで抑えてく。どうやら初めから寒くなかったのはコレのおかげみたいだ。

「便利だなーコレは」

思わず呟き、それを右掌を上に向けて出してみる。それが掌で小さな炎のようになったのを確認し、近くの木に移動。落ちている木の枝を拾ってみる。

「さて、調整の練習開始だ」

それから俺はその木の枝を妖気の炎に近づけては燃やし、近づけては燃やしを繰り返す。これで一気に炭にならない様な加減を練習だ！加減を知らないといざというときに辺りを焦土にしてしまうからな！

それと、スサノオの一部分だけ出すとか出来ないかも試さないとか一々全身変わるの、戦いの中では後手に回ってしまうからな。あとは畏とかの練習か……やることが山ずみだ……。

あ、そうだ。念のためまだしばらくは、全身スサノオにはなるまい。と言っても制御出来ればの話だがなあ。

「出来た！」

転生初日から軽く五十年がたった。そこらの生き物を食ったり果実食ったり……え？早い？そんな事言っても同じ事を繰り返す地味な作業が見たいか？嫌だろ？

つてな訳で、俺は自分の力をようやく制御出来る様になったのさ！

「いやしかし、誰も来ないなあ」

そう。この五十年、人はおろか妖怪に一回も出会わなかった。この山にはいないのか、はたまた俺が何度もミスった練習で塵になってしまったのか……まあどうでもいいか。お陰で全身スサノオ化から部分的なスサノオ化まで、雷斬刀の使い方、妖気の扱い方等々。完璧マスターしましたよ。

まあ……全身スサノオ化したら軽く体長五メートル近くになったがね。その後丸々一年間森に生き物がいなくなってしまったのには驚いたよ。多分変身してテンション上がってて変な妖気が駄々漏れだったからだなあ……落ち着いてなるべく優しい気持ちでいたら前より増えたけど。

ここ最近はずっとその状態にいるから俺の周りは動物だらけで毎日兎やリスをモフモフし、山犬や熊とじゃれあうのが日課になってしまった。それはそれでかなり落ち着くからいいんだが、そのせいで肉を食べなくなった。だが運が良い事に魚がいる川があったから、それでタンパク質を取ってはいたがね。

話がそれだが……それだけこの暮らしはのんびりするには良かったんだ。この山自体も俺の妖気に当てられて霊山みたいになっただけ。所謂マイホーム？

んで、そのマイホームから出発を決めた今現在。凄くウルウルした目でこちらを見てくる動物達に囲まれてます。

「すまないな、お前達。俺は行かなきゃならんのよ。いずれ帰ってくるつもりだが、いつになるかわからん。だから俺がいない間、ここを……頼んだぞ？」

俺が言うところちゃんと理解してくれたのか、皆一様に一鳴きして返事をしてくれる。彼ら自体の中にも格が上がった奴が何匹かいて、今いるのは主にそいつらだ。でっかくなったり、一部が変異したり、尻尾が割れてたりと人語は話さないが軽くもののけ姫化してるんだわ。

だからしばらくはこの山は安全だと思う。まあ、もし何かに乗っ取られても取り返すがね？

「それじゃあ、いつてきます」

俺はそう言っただけに背を向けて歩き出す。なついてくれたあいつらには悪いが、俺もやりたいことがあるからな。それに鬼武者シリーズを集めないといけないし。

いい加減雷斬刀にも血を吸わせてやらんとな。いつまでもレベルじゃ嫌だろうし。

と、言うわけでこの先俺がしたいことは！

一、国内を一周ぶらり旅。

二、その中で鬼武者シリーズ集め

三、俺の百鬼夜行作ったるぜよ！

四、原作ブレイク上等！

五、花開院家の今いるであろう初代秀元に会う

だ！当面はこれで行くぜ！一二三はぶらぶらしてたら何とかなるか
もしれんが、五は早急に行かないとな。十三代目が太閤死後にいた
んだから五十歳寿命で逆算して、大体平安時代だから今頃出来たん
だと思うんだわ。

もう五十年経ってるから二代目になるかもだが……まあそこら辺は
なるようになるだろ。

「よし、今から俺の物語の幕開けだ！」

思わず口元がつり上がるのを隠さずに、俺は降りた山から一歩踏み
出した。

彼は知らない。一度スサノオ化した時にバツチリ人間に見られてい
た事を。

そして人間にその容姿から六角牛王と呼ばれ、着々とスサノオの道を辿っていることも。その山も彼がいることで六角牛山ろっかくしやんと呼ばれていることも。霊山としてその近辺の人々からは畏れ、敬われ、祀られていることも。

彼が知るのは、もう少し先の話。

第二話（後書き）

主人公これからいろんな事に首を突っ込ませるつもりですので、好御期待！

第三話

山を降りた俺はとにかく村を探す事にした。京に行かなくては秀元に会えないが、まずどっちに進めば良いか分からないからな。

まあ村も何処にあるか知らないんだけどさ。

「とりあえず、道なりに進むか」

幸いな事に道はある程度整備されていたので右か左かだけですんだ。で、俺は直感で右を選択する。

それで道中何もなくて道なりに進んでいくと、村があっただっていえばあつたんだが……。

「山賊だあー！」

山賊に襲われてました。そこその規模の村なんだが、大体三十人位のボロい刀を持った山賊に襲われている。いやー、この時代には山賊がいるのか。

それにしても、せっかく村見つけて道聞いてさっさと京に行かなき

やならんのにこいつら邪魔だなあ……よし、潰そう。

「さて、雷斬刀の経験値になってもらおうか」

俺は雷斬刀を出して目の前の村に入っていく。

すると、入ってすぐにじいさんを斬ろうとする奴がいたので横を通りながら一閃。

「ぐえっ」

上半身と下半身を泣き別れにし、放心状態のじいさんをそのままに歩いていく。次は少し前で女性が子供を守るように抱き抱えているのを三人で囲っている奴ら。

「ぐへへへっ」

「女は奪え！ガキは殺せ！」

「ハハハはぐえっ！」

それもまたこちらに何か言う前に首を狩る、狩る、狩る……うーむ、効率が悪すぎるな。それに面倒だ。

「一気に終わらせよう」

俺は妖気をこの村全体に広げ、山賊のみを索敵。それを確認し、雷斬刀を持つ右腕のみをスサノオ化。

この時に出る黒い妖気に包まれて変わるのだが、炎に包まれて変わる様で俺は気に入ってる。しかも甲冑みたいな見た目で肘とか肩から鋭い角というか牙というか……そういうのが生えてるんだが、着物ごと変わるので破れる事がない。多分ハデス様のお陰だろう事は明らかだ。ガチで素材が揃ったら祠を作ろうと思う。

「さて……さつさと死ぬがいい」

言うが早いか、俺は右腕を索敵した山賊共に飛ばしていき、とにかく斬る。これは身体の一部を自在に飛ばして扱う技で、孔雀王のサノオの子孫であるタケミナカタが使っていたものだ。その間当たり前の様に右腕が無くなるが、めっちゃうちゃ使い勝手が良い。

山で練習中にふと思い出し、子孫が出来たなら出来るかな？ってやってみたら出来たんだ……正直テンションの上がり方がよかったのは覚えてる。ちよっと違和感とかがあったが、すぐに慣れた。

頭は怖いからやってないが、手足は完璧になったのだ！

「あつ、あの……」

「ん？」

俺が黙々と首ちょんぱしていると、先程の女性から声をかけられる。そういえば腕とかガッツリ見られてたな。

「あ、あなた様は……？」

気が動転してて言葉が一拍遅れながらも聞いてくる女性。名前か……別に構わんかな？

「俺はスサノオ。さっきあの山から出てきた所だ。ところで道を聞きたい。都に行くにはどうすればいい？」

右腕はザクザク首ちょんぱしながら普通に会話するのってなんかシユールだな……。

「え？あ、都に行くならそのまま行かれて次の町で地図を手に入れば……あれ？あの山って、え？」

「えっと……ありがとう」

ますます気が動転しながらも律儀に答えてくれた彼女を残し、俺は礼を言つて村から出るために歩き出す。これ以上あそこにいたら彼女が大変な事になりそうだし。あ、ついでに殺した山賊の刀は取っておくか。

「っと、終わったか」

村の出口につくと同時に終わったのを確認したので右腕を元に戻す。雷斬刀は一気に血を吸い上げてたから消しておく。現在左手に二本、右手に三本、合計五本刀をゲット。確かこの時代にはまだ通貨はなくて物々交換だった気がするからな。地図と食料をこれで何とか出来れば良いんだが……とは言つても俺は食事は一年くらいならなくても大丈夫だ。そこまで根詰める気はないけどさ。

とりあえず、刀はかさ張るからそこの植物の蔭とかでぐるぐる巻きにしておこう。

「……よし、まずは地図だ地図」

歩きながら探したので日が暮れてしまったが、良い感じの蔭があっ

たのでそれでまとめて背中に背負い、次の町へ向かう。

車や自転車とかのありがたみがよくわかる……今日は野宿かあ。

後日、あの村でスサノオ信仰が始まるのだが、それはまた別の話。

第三話（後書き）

他の妖怪が出るのはもう少し先。

もう少し待ってくださいね。

第四話（前書き）

まだしばらくはのんびり行きます

第四話

あの山賊を皆殺しにした村を出て一週間が経った。え？また早い？道中何もなくて更に延々歩き続けるだけなのを聞きたいか？

まあそんな訳で、俺は言われた町に到着した。商店がいくつか並んではいるが、それよりも貧民層の人々が多い。何とも言えないが、ここで補給しないとどうにもならなのでさくさく行きます。

「おーい、おっちゃん。布と糸と紐くれ」

「ん？おお、分かった。どれにする？」

「頑丈なのにしてくれ」

それから二三言葉を交わし、刀二本と交換で黒い布と糸と紐をもらう。ちよつとゴツいので何で出来てるかは知らないが、丁度良い。

俺はおっちゃんに針を借りて布を縫い合わせ、縦長の袋にする。糸には地味に俺の妖気染み込ませているので切れる事は多分無い。そして切り込みをいれて紐を通し、縦長の荷物入れの出来上がり！斜めがけも出来るようにしているので、手で持ち続ける必要はない。

そして余った布で小物入れや財布や小物等々、現代知識を総動員して今作れる見た目パクリな物をいくつか作った。折り曲げて立体感出したり、デコレーションしたり。

だがそれをおっちゃんの店に上がらせてもらって作っているので、めちゃくちゃおっちゃんがガン見してくる。

「お前さん、器用だなあ……布と糸でこんなに良い物作れるたあな。こりゃあ貴族様にも売れるんじゃないかねえか？」

「そりゃどうも」

まあ現代人ですから、とは言えないために適当に誤魔化す。どうやら俺は凝り性のようで、細部までこだわらないと気がすまないのよさ。

「そうだ！お前さん、この作り方を俺に教えちゃくれねえか？俺の勘じゃあこいつは売れるぜ！」

中年が目を輝かせても気持ち悪いだけだが……いいか。その商人気質に打たれたということで教えよう。

「もう一組色違いで同じのを」

「かあゝっ！ 抜け目ねえな！ 分かったよ、持ってけ！」

だがタダという訳じゃない。そして俺は作り方とさつき作った小物を数点置いてくのを付けて、貴族用の色鮮やかな布を手に入れた。ほとんどぼったくったような感じだが、このおっちゃんなら何とか生きていくだろう。ほぼ確信に近い。

それから二三日ここに泊まり、作り方を頭に叩き込む様に伝授した。本職だから覚えが早くて助かったな。ってか用途を知れば知るほどおっちゃんのテンションの上がり方がヤバかった。

「こいつはっ！」とか「なんとっ！」とかうるさかったのは良い思い出だ。その間に地図も食料も準備出来た。しかもおっちゃんの計らいで安くなったので刀が一本残るとい嬉しい誤算が起きた。それに地図を手に入れた事でここが遠野ということが発覚。しかも京に行くには山を二つ抜けなければいけないとの事……遠野勢ってもういたかな？

で、おっちゃんの半端無い適応力で作り方を完全にマスターしたので、俺はいろいろ荷物を袋に突っ込んで町を出る。去り際におっちゃん

「また来いよ！」

と言ってくれたのが耳に残った。多分あの人はまた会う気がする……何故だか知らないが。そう考えてしまう自分がいるのだよ！

……無駄にテンション上がったが、まあそういうことで。俺はさっさと町を出て歩き出した。

第四話（後書き）

次話でやっと別の妖怪です！お待たせしました！

第五話（前書き）

よくよく思い出せば紫電というのは玉の名前で、刀事態は雷斬刀でした……編集したので、ご確認を。

第五話

おっちゃんがいた町を出てからまた1ヶ月程経った。いや、この時代のここいらは本当に何もありません！それに一応、すごく稀に人が通るが、夜になっても一回も妖怪には会わなかった。何故かな？

「そんで、やっとお山につきましたと」

目の前には京に行くために通らなくてはいけない山がある。別段ここに来るまで疲れることは無かったんだが、前世が前世なために何となしにため息が出る。それにようやくと言うか、そこそこの数の妖怪の気配も感じる。

だがいつまでも突っ立ってる訳にもいかないので、俺は袋を背負い直して下駄をカラカラいわせながら歩き出した。

山の麓からしばらく気分的にのんびり上がり、夜になったので一息つこうと良さげな場所を探す。そして少し進むとえらく不自然に開けた場所に出た。

そこには一つだけちょこん、と座るのに丁度良い切り株があった。そこで周りには麓で確認したそこその妖気がたくさん……いや、二つ程抜き出てるのがあるが、別段どうでもいい。人間なら普通に引かかるだろうが……まあ大人しくこのあからさまな畏にかかってあげよう。初めて別の妖怪に会うわけだからサービスだ。

俺はカラカラと下駄を鳴らしながら切り株に向かい、座る。

「む？」

するといきなり俺の尻が凍りつく。幸い手は置いてなかったが、完全に今は動けなくなった。あくまでも“今は”だが……尻が冷たい。

「フッフ、お兄さん。こんな夜更けに山に入るなんて、危ないわよ？」

「ブワッハッハッハ！こんな感じにな！」

俺が尻に霜焼けができないか心配していると、声と共に潜んでいた奴等が続々と出てくる。そんで言わずもがな囲まれている訳だが、ざっと見る限りこいつら全体的に若い。多くて目の前の二人が大体三十年そこらってやつか？俺も実際そこまで変わらんが、目の前の二人はなまじっか力があるせいで、ここいらの奴等が弱いせいでお山の大將気取ってやがるみたいだ。

この山の奴が全部出張って来てる様だが……あれか？ルーキーズというやつ？

「おいおい、あいつビビって声も出ないみたいだぜ？」

「まあ当たり前だろ？目の前にはこの山の最強二人がいるんだぜ？それに俺達も囲ってるしな！」

「だよな！」

……何やら俺が状況把握をして黙っていると、怖がっていると勘違いした連中の下卑た笑い声が聞こえてきた。地味に腹立つ。

「ねえ、あのお兄さん私好みだから貰ってもいい？」

「別に構わねえが、即行で氷付けたあ運がねえな。だがお前も気に入った奴をすぐに氷付けにしたがるのはなんとかならねえのかよ？この前だって――」

目の前の二人が俺を無視して話を進める。せつかくなのでこいつらだけ見てみることにした。片方は明らかに雪女で、顔は整っているが肌が真つ白で背中の中ごろまで伸ばした薄い水色がかった黒髪をしており、伝承通り白い着物を着ているボンツキュツボンツ！のお姉さん。

もう片方は、ニメートルは軽く超えてるデカさで赤黒い肌を持ち、腰鎧と兜をつけている。胴には無く、腹が出ているが恐らく筋肉の塊だ。顔は下顎から猪の角の様な牙があり、普通の人間ならダッシュで逃げる怖い顔……ってか鬼武者で最初に出てくるボスキャラのまんまじゃなか！

あれか！？ハデス様のお戯れか！？

「――っと、話がそれたな。まあいい。さつさとやれよ」

「はいはい。お兄さん？私とイイコトしましょ？」

あまりの事とすぐ気づけなかった事で悲しくなりながら呆然とする

という器用な事をした俺の顔を、雪女が掴んでそう言った。俺はしっかりと彼女の目を見つめる。恐らく伝承通りにキスして氷付けにする気だろうが……。

「……調子に乗るなよ貴様ら」

「えっ……？」

俺は妖気で一気に尻の氷を溶かし、そのまま両腕両足をスサノオ化する。そして右手に雷斬刀を持って左手も強く握りしめる。この間二秒！

「弱い故に愚かなのか、愚か故に弱いのか……どちらにせよ、死ぬがいい！」

俺は山賊の時に使った技に左手で殴ることもプラスして囲っている雑魚共を細切れにしていく。地味に苛立ってるので少し力を込めて殴ると、風穴が開いたり小さい奴らは身体がはじけ飛ぶ。雷斬刀は妖怪の血が吸えて嬉しいのか知らないが、ドクンドクンと脈動している。刀が脈動するなんて変な話だが、実際そうなってるんだからすごい。そしてその間に俺は切り株に繋いでいたものがなくなったので、固まっている雪女より頭一つ大きい身体を起き上がらせる。同時にいきなり立ったので雪女が尻もちをついたが……まあ後だ。

脅しとさっきの発言へのストレス発散のために三分の一程度狩り終えた俺は腕を戻し、ようやく立ち直った二人を見る。鬼は何処からともなくでかい棘のついた黒い棍棒を出し、雪女は俺から距離をとって鬼のもとへいった。残した理由？他の奴らよりは強いし、俺の実力も試してみたい。それに……できるなら俺の百鬼夜行に加えない。初めて会った妖怪たちだし、ルーキー達と共に学んでいく……なんかいいじゃん？

「てめえ……何しやがった!!」

「私の氷があんな簡単に……」

警戒するのが今更な気が大いにするが……まさか気づかなかったのか？力量差は良いとしても、いくらなんでも妖怪だということぐらいは……。

「……あなた、妖怪だったの？」

「何っ!？」

「……気づかなかったのか？」

「だ、だってあなたから妖気を感じなかったし……」

ああ……そういうことか。俺温度調節とか以外だと極端に垂れ流すの抑えてるからなあ。

「臭いも人間の臭いがあったからてっきり……」

まあそれはしばらく人間だらけのところにいたから臭いがついただけだろう。それに他の妖怪に全然会ってないしね。

「そうか……だが俺は見ての通りれっきとした妖怪だ」

二人や周りの残った奴等が目を細めてこっちを見る。むっ？夜で暗いから黒い腕は見にくいかな？なら……あれだな、初披露といきますか。力量差見せて、強くなりたいっ！つつつてついてくる熱血君がいれば楽なんだがな。そう都合よくはいかないと思うけど。

「そんでまああれだよ。お前らちよいと弱すぎるからな……稽古をつけてやるう」

「「「ッ!?!」」」

俺は何故だか脈動が速くなってきた雷斬刀を収めて、全身に漆黒の妖気を纏う。そしてそれらが徐々に本来の姿であるスサノオの形を作っていく。なんかこう……変身っ! って感じで全身スサノオ化が完了した。

ちなみに大きさは長年の練習により、人間時の身長サイズから五メートル位まで変えられるようになった。そして今は人間時サイズ。

「さて……始めようか」

俺はその場から一歩踏み出した。

第六話（前書き）

遅くなりました！初戦闘は終了です！

第六話

S i d e 山の妖怪

「まああれだよ。お前らちよいと弱すぎるからな……稽古をつけてやろう」

「「「ッ!?!」」」

目の前の人間だと思っていた男の姿がどす黒い妖気に包まれて変わっていく。全身が甲冑の様な黒光りするものに変わり、頭の下には三本づつ太い角が生えている。ズラリと並んだ鋭い牙に、その牙を少し太くしたような口が胴全体についていて、もう一つ胴に口が出来た様な感じだ。見た目は鬼に似ているが、明らかにそれとは違う。妖力から何まで全てにおいて、格が違う。違いすぎる。

先程までの状態でも桁が違う強さを持っていたにも関わらず、だ。底が見えない。現にこの山最強の二人の顔が青ざめているのが証拠でもある。

「ん?どうした?かかってこい。なに、殺しはせんさ」

「くっ、クソがああああ!!」

手招きしてくるヤツを見て、この山一番の力をもつ鬼、轟鬼が渾身の力をもって自身の棍棒で殴り込む。しかし、それはいとも簡単に受け止められた。

「中々良い力だ。育てば強くなるだろう。だが動きが直線的すぎるなあ」

「ぐっ、ぐううつ！動かねえ!？」

「あ、あの轟鬼の一撃を片手で……!!？」

「嘘でしょ!？」

その凶悪な右腕一本で受け止められ、更にはその受け止められた棍棒が軋んでいた。

「それじゃあ、今度は俺から行くぞ？」

「ぐあっ!!」

轟鬼が男の左腕で殴られて吹き飛ばされる。それも、後ろにある巨大な腕で。

「さつてと、久しぶりに畏を使ってみたが……効果抜群だな」

男が動かすと同じように動く浮かんでいる真つ黒な巨大な左腕。あれがあるだけで、身体がすくんで動かない。完全に別格なのが経験の浅い自分達にも理解できた。すでにこちら側はその力に当てられて、何人も倒れている。

「おら、さつさとかかってこい。勿論今度は全員でな？」

「「「う、うあああ！」「」「」

手招きしてくる男にまるで操られているように、自分達は一気に男にかかっていった。

「あーらら、全員見事に気絶してるな」

山の残りの妖怪、ざっと百匹前後。全部殴り飛ばしましたっ！いやあ、力加減はわかってるから畏の発動の鬼發^{はっ}を試しに抑えて使ってみれば、凄いこと凄いこと。気圧されて倒れる奴も出るとは正直思わなかった……そういう奴等は多分まだ経験が浅いし、若い部類に入るからだと思うがね。あの雪女は更に顔を青くしてたけど、ちゃんと攻撃してきたし。

「ふう……さて、治してやるか」

俺は人間の姿に戻ってハデス様からもらったもう一つ的能力、治癒術をこの妖怪たちに使用する。この治癒術の見た目は俺の黒い妖気が対象にまるで燃えているかのようにかかる。この五十年で山の動物達の治療もしてたから他よりは経験が少ないものの、きちつと自分の意思で操れるようになっていたからこのくらいはわけない。それにこの治癒術、効果が半端ないのだ。俺自身の妖気が混じっているからか、自分より格の低い相手なら消毒込みで腕一本くらいすぐに治るし、しかも怪我をする前より根源的な部分で強くなるんだわ。あの山のデカイ動物達が良い例だ。ただでさえ能力の練習で俺の妖気に当たっているのに、それも加わったから普通にヤバイ。こいつらぐらいなら長一匹でなんとかなる。今現在山の動物達のおか

げで山の防衛力は尋常じゃないはずだ。

「っと、これで終わりか」

考えている間に全員分終了。広げる感じでやったから早い。なんとなくふう、と汗をぬぐう動作を試みる。まったく疲れてないんだけども。

「うう……」

「ぐっ……」

「ん？」

全体を見渡していると偶々目の前にいた雪女と鬼が目をさます。と言っても目が少し開いただけで身体は動いてないだが。

「あなたは……？」

寝転んだまま小さな声で雪女が言ってくるので聞き取るために屈む。鬼も目だけをこちらに向けているから、同じことが聞きたいんだろ

う。ブーツとしてるから夢うつな感じだろうが、聞かれたからはちゃんと答える。

「俺はスサノオ。全員傷は治したから安心しろ」

「ん……」

勝手に手が雪女の頭を撫でる……五十年女つけ無しだから危ないな。いろいろと。うん。早く移動した方がいいかも。

「……どこ行くの？」

「ちよいと都に用があつてね。そこまでのんびり旅してるのさ」

「旅、か……」

力が完全に抜けてるから妙に色っぽい声で聞いてくる雪女。かなり美人さんなので余計ヤバイ。鬼も何か言ってるがそれどころじゃない。

「俺は行くからな。達者で暮らせ」

俺は置いていた荷物を抱えて足に力を込めて跳ぶ。早くここから離れたかったから、俺は木の枝から枝へ忍者の如く跳びながら即行で進んでいった。今日は休み無しか……？

S i d e 雪女・鬼

スサノオが去った後互いに仰向けに倒れたまま先に鬼が口を開いた。

「負けちまったなあ……」

「そうね……」

どこか他人事の様に二人は話す。負けた悔しさもあるのだが、それ

よりも今まで自分達がいかにお山の大将でしか無かった事に対する恥ずかしさの方が勝っていた。それからしばらく何を言ってもなく黙って少し明るくなってきた夜空を見上げていた。

「……私、あの人についていくわ」

「奇遇だな。俺も同じことを考えていたぞ。だが一応聞く、どうしてだ？」

ゆっくりと身体を起こす。すると全てではないがちらほらと同じように動き出す妖怪達。彼らも二人と同じ思いを持っていた。

「簡単なこと……惚れたのよ。一目惚れ。あなたは？」

「あの旦那についていけば確実に強くなれると思ったんだ。本人からも育てば強くなるって言われてるしなあ。全員」

「ふふっ、そうだったわね。なら言った限りは責任取ってもらわないと」

「ガッハッハッハ！そうだな！言った向こうがいけない！俺達に火をつけたんだからな！」

ひとしきり笑って立ち上がる。スサノオの治癒術のおかげで体力は完全に回復し、況してや増えているのだから心配する必要はない。

「よし！なら早いとこ行かないとな！見失っちゃう！」

鬼が歩き出すと続々と続く三十前後の妖怪達。皆一様に決意を決めた目をしている。

「フッフ……待ってなさいよスサノオ。絶対に私のモノにしてやるんだから」

明けた太陽を背に、ついていくと決めた妖怪達がその場から去った。

第六話（後書き）

なんかグダってしまいました……。ちなみに雪女の最後の台詞を言った時、スサノオは寒気がしたそうです（笑）

第七話（前書き）

今回は雷斬刀のお話です。

第七話

あれから俺は太陽も上がり、朝霧が立ち込める中未だ忍者跳びで二つ目の山に入っていた。このスサノオボディはまるで疲れを知らないので、ホイホイ進んでる状態だ。

「あ、そういえば雷斬刀どうなった？」

一旦動くのを止めてわりかし太くて座り込めそうな木の枝を探しだし、そこに座った。そして雷斬刀を取り出してみると、あの時に時間が止まっていたかの様に続きみたいに脈動しだした。

「ううむ、これはどうし……え？」

雷斬刀を胸の前に構えて刃の部分を見ていると、急に脈動が一気に早くなり、一回骨が折れた様な音を出してから凄くエグい音を出しながら形が変わっていく。

——バキッ！ゴキ、グチュンッ、メキメキメキメキ……ジュルンッ！

「おお……これはまた」

思わず口から呟いてしまう程エグい音だったが、無事雷斬刀がレベル2になりました！レベル1の時には鐔の刃とは逆の部分に瘤の様なのが一つあっただけだったが、先程の成長でその長さと数が増え、その間には最後のジュールンツ！って所で筋肉の繊維みたいな赤い膜で繋がっている。脈動もゆっくりと収まっていった。あと刀全体の長さも少し伸びたというかでかくなっただけだし、ゲームと同じなら鬼戦術の威力も上がってるはずだがこれは試してみないとわからない。

「しかし何でこんな成長の仕方なんだろう？お前も痛くないか？」

なんとなく聞いてみると刀が一回脈動した。わかるんか！？偶然か！？

「おおぅ……まあまた敵さんが出てくれば使うから、待っていてくれや」

俺は美しい刀身にキスして雷斬刀を消す。俺は自分の相棒には信頼と愛情を注ぎます。こっちが刀を信頼しなきゃあ向こうも応えてくれないと思うんだ。

「さて、一休み出来たし一気にこの山終わらすかね」

足だけスサノオ化させてさっきより速く移動する。この山には特に

妖怪がいるようでもないみたいだからね。その間に雷斬刀について考えてみる。

本来雷斬刀は紫電という鬼の力を込めた玉を主人公の鬼の籠手に装備というか埋め込むというか、そうすれば使えるようになる刀だ。要はその玉の力を具現化したような感じだ。なのでゲームでは敵たる幻魔の魂でその玉の方を強化する事で刀も強化されていくのだ。しかしながら俺は籠手も玉も無く、刀だけな訳だ。だからあんな風に成長したんだと勝手に結論をつける。

というかハデス様も成長と言ってたから俺も言ってるけど……さっきの脈動といい、鬼武者シリーズの武具達は生きているのか？

「……まさかな」

苦笑してふと周りを見ればすでに頂上で、朝霧も晴れていた。まあ、この事については他の鬼武者シリーズを集めていけばわかることだ。気長にいこう。俺には時間はたっぷりある。

「そうと決まれば、さっさと行くとするか」

俺は一旦思考を止めて、再び山の移動を開始した。

その頃の雪女・鬼グループ

「この旦那の妖気を辿って行けば大丈夫だ！」

「スサノオ〜！待ってなさいよー！」

現在二つ目の山の麓付近を移動中。スサノオの残った妖気を見つけてテンションアップ。

第七話（後書き）

マックスレベルは3です。でもここからは中々成長しないので、そう簡単にはレベルマックスにはなりません！

雪女達に関しては、スサノオがペースを上げたために見失わない様に頑張ってる現在です。

第八話（前書き）

9月11日一部編集完了。

三日↓一週間

一か所セリフの付け加え。

第八話

雷斬刀の成長から急に妖怪が出るようになる以外はこれといって何もなく、二つ目の山をホイホイ下りて襲ってくる奴等を返り討ちにしながらしばらく経った。どうやら下りる所を間違えたようで、下りても下りても山ばっか。山脈にでも出たか？

それに何度も言うがこの時代、俺が今いる東北地方は本当に何も無い。あるのは自然と動物と急にありえん程出てきた妖怪だけ。確か蝦夷らがいたとは思うんだが、そういう人達すら見やたらん。俺がいるところが偶々そうなのかもしれないな……それにしても

「ゲヘヘ、ここは俺達の縄張「ふんっ！」ギヤアアアア！」

「「「親ぶうーん！！」「」」

出るわ出るわ、最初の一ヶ月位が嘘のようだ。まあここ遠野近辺だし、多くの妖怪の誕生地でもある訳だからなあ……でも出てくるのは手応えの無いやつばかり。最近大量発生でもしたのかって位若いやつらばっか。今から増えていくのか、ちょうどそういうゾーンに来ているのか……で、最初の山の奴等と同じくこのままじゃあすぐに死ぬだろうと思って。

「おらっ！右っ！左っ！避けるばっかじゃなくて反撃してこい！で

なければ死ぬぞ！」

「「「いやあああ！」「」」

鍛えてます。来るやつ来るやつ殴り飛ばし、前世の軍人さんも真つ青な短時間スパルタをやり続けてる。おかげでギリギリ殺さず苛めのスキルを修得してしまった。まあ終わった後でちゃんと治療してるから、時間がたっているにも関わらず余り進めてないのが現状だ。

「はあ。道を聞こうにもこいつら問答無用で突っかかってくるし、進めないし……あの時我慢してあいつら連れてけば良かったかなあ」

血の気が多すぎるよ皆さん。俺が言えた義理じゃないけどさ……まず方向がわかんないから地図も役に立たないし。

「……とりあえず行くだけ行ってみるか」

ぐるぐる同じところ回る遭難者の典型的パターンにはなりたくはないが、ここにいてもしょうがないしね。何とかなるさあ！

「ぬ、ぬううう……！これは本気でヤバくないか？」

あれから一週間……とりあえず進んでいったはいいものの、見事にドツボにはまり今もなおさ迷ってる。木の上に上ってみたが、変わらず一面木、木、木……しかもここは盆地みたいで周りがぐるっと山に囲まれてた。もうあんまりにもだし、なんか寂しくなったので今俺はなんとなく雷斬刀を握りしめている状態だ。

「なあ相棒……俺に道を示してくれ……！」

苦し紛れに雷斬刀に祈ってみる。前に応えてくれた？ので淡い希望を込めてみる。するとなんと！

——ドクンッ

「マジで！？応えてくれるか！流石は相棒！」

応えてくれました！それでも意図が解らずキョロキョロ辺りを見回すと、刀の向きを俺が向いていた方向に向けた時だけ脈動することが判明した。そっちに進めってことですか！

「よし！なら善は急げだ！」

俺は雷斬刀を肩に担いでその方向に走り出した。なんか最近独り言が増えてきたな……ちょっと危ない？

進めば進むほど雷斬刀の脈動が早くなっていく。しかしふと考えると、これはおかしくないか？と疑問が出てきた。確信があるわけではないが……まるで共鳴でもしてるようだ。

「む？」

考えていると、急に周りの空気が変わった。特別霧とかそういうのではなくて、これは――

――ギンッ！

「くっ!？」

「ちいっ!」

――敵さんが出てきたってことだ。

「……おいおい。不意打ちたあ随分粋なまねするじゃないの」

背後からの二匹の妖怪の一撃を雷斬刀で受けて弾き返してから後ろを向く。するとそこには薙刀を持った二匹の黒い鴉天狗がいた。この時代に薙刀なんてあったかね？

「これより先は我らの縄張り。即刻立ち去りなさい」

「あんたの来るところじゃない、ってね？」

薙刀を構え直して言ってくる肩までのストレートの真面目っぽい方と髪を後ろで結っている軽っぽい方。容姿から服装が同じだから髪と目と声で違いを判断するしかない。

「俺はここを通って都に行きたいだけだ。ちょいと迷っちゃったんだが……通らせちゃあもらえんかな？」

始めに警告してくるタイプは初めてだ。出来れば交渉で何とかしたい所だが……。

「何言ってるの、都へはこっちからは行けないでしょうが」

「真反対です」

マジかよ……俺ってばぐるつと違う道で一周回ってたって事かな？ 雷斬刀のこの脈動はいい……確かめという損はない、か？

「ふむ、情報感謝する。でもな？俺はこっちにも用があつてね」

俺がそう言つと、結っている方がため息をつく。

「はあ……なら俺達はあるを止めなきゃならん。それが俺達の仕事でねつと！」

「疾っ！」

言い終わるより先に突っ込んできて次々に斬りかかってくるのを雷斬刀で受け流したりして避ける。ここいらの中で一番できるな。最初の雪女と鬼と同じレベルか？それにしても……言い種から縄張りの門番的なやつらか？

「……お前達何を守っている？」

「言っかよっ！」

当たりか。この先にはやはり何かある。なんとも分かりやすい反応するなあ。そう言ったらあるって言ってるようなもんじゃないか。

「そうか……ならそろそろ反撃といこう！」

「ぬおっ！？」

「くうっ！……！」

頭の中で苦笑しながら一気に雷斬刀を横風ぎに振るうが、防がれたので薙刀に叩きつける形で吹き飛ばす。普通の刀なら壊れるだろうが、こいつは特別製だからな。壊れる事は決してない。

「っ痛う！なんて馬鹿力だつてんだ！」

「っ……中々腕が立つようですね」

「そりゃどうも」

吹き飛ばした方向から空を飛ぶことで勢いを軽減したのか、すぐに戻ってくる。相手は空中だが、手は痺れて少しの間動かないだろう。だって薙刀持つ手が震えてるからさ。持ててる方が凄い。

「しかし、空の上ではあんたは不利だ！」

『鬼發・飛燕―鴉―』

いきなり空から二人が自分の黒い羽を飛ばしてくる。しかもこれは鬼發か……なら俺も使つかね。

『鬼戦術・紫電』

俺は雷斬刀に妖気を流し込み、鬼戦術を発動させる。これにより、雷斬刀の属性である雷を刀身に纏わせ、尚且つ素早さが上がるというチートなものだ。でも鬼戦術ひょういって鬼憑ひょういと同じじゃないか？と思ったりしながら来る羽を全て弾き落とす。弾く時の感覚が刃物みたいだ。

「っ！アレを防ぐかい？なんとも化け物みたいなやつだ」

「無駄口を叩いている暇はなっ！グハッ！」

「ガッ！」

真面目な方が言い終わる前に弾いた羽の影響で舞っている土埃を力モフラージュにして、鬼發の右腕を二人の後ろに出して最初の位置に殴り落とす。凄い勢いで落ちてきたが、死んではいないだろう。実際雷斬刀でケリをつけようかと思ったが、今の状態では消し炭になりかねるので却下した。

「俺の勝ちだ。さあ、どうする？」

「ぐっ……ガハッ！」

「グフッ！」

雷斬刀を突きつけながら問うが、返事はない。二人とも血を吐いて倒れたままだ。やべえ……やり過ぎた？

「むう……治すか」

このまま死んでもらっちゃ困るから即座に治療を開始する。この先に進むためにも、門番はどうしたーだの言われたら面倒になるからな。

「……よし、終了」

しばらく治癒の炎をあてて傷口とかを完全に治す。すると痛みがなくなつて気が抜けたのか、気絶してしまふ。このまま担いで行つたとしてもぐだぐだしそうだし……起きるまで待つとかか。

第八話（後書き）

スサノオがチートすぎる……自分でもびっくりです。

第九話（前書き）

なんだか……ちょっとぐだっ
たかもです。

第九話

「う、うん……」

「お？起きたか」

「っ！お前は！」

あれから待つこと四、五時間。ようやく目を覚ましてくれた鴉天狗（真面目な方）。その間俺は先程の戦闘時に俺が吹き飛ばした事で開けた事で出来た枝を使い焚き火をしていた。暗くなってきたしね。

「おいおい、そう殺気だつなよ。俺に戦闘の意思はない。この先に用があるだけだ」

これ本音。今は地面に突き刺している雷斬刀が何に反応しているのかを知りたいだけ。

「……どうやら本当のようですね。しかし、ならば何故まだここにいますか？」

「やった俺が言えた義理じゃないが、怪我人でしかも死にそうなやつをほっとくわけにもいかんだろ？それに、お前達は中々優秀なようだしな……」

「なっ……」

少々話を聞かない所もさつきを見る限りはあつたが、戦ってみれば中々優秀な事がわかった。目標である百鬼夜行に是非とも加えたい所だが……まずは雷斬刀のが先だ。すぐに頷いてくれもしないだろうし。

「はぁ………なんだか毒気を抜かれた気分です。錬！起きなさい錬！」

「ん………あと五ね「ふんっ！」んぐふぁぁあー！」

目を丸くして横の軽いやつ、錬を始めは揺るだけだったが、あと五年と口走ろうとする前にもう一人の鉄拳が炸裂していた。鳩尾に錬とか言うのがのたうちまわってるぞ？

「お見苦しいものをお見せしました………申し遅れましたが私、鴉天狗の葵と申します。そしてこののたうちまわってる馬鹿は双子の愚弟、錬です」

「けほっ、げほっ……何で敵さんに挨拶してるのさ？」

平然とした顔で正座しながら自己紹介をしだす葵にプルプルと四つん這いのまま抗議する鍊。どうやらいつもこんな感じみたいだな、手馴れてる感じがするし。

「……私達に害をなす人とは思えないからです。殺すのならあの時殺せたはずですし、無視して行っただとしてもあの傷では私達は死んでいました。それを完全に治療し、尚且つ体力その他諸々が何故か上がっているのですよ？彼に敵対の意思はない……私はこれでも人を見る目はあるつもりです。本人もそう言っただけで待っていてくれましたし、ね？」

「へえ、驚いたな……俺と話ながら全部頭の中で確認してたのか？」

「当たり前です」

その当たり前が中々出来る事じゃないんだが……特に身体能力諸々の上昇なんて動いてないんだからそう簡単にわかるもんじゃない。コイツは、ますます欲しくなったな。それに弟君の方も軽口を叩くタイプではあるが、言われた事を素直に頭に入れて確認しているし……何だ何だ、まだまだ京には遠いのに将来確実に有能になるなのが多いぞ。後はいかに俺に器があるかだが……こういうのは自然に集まってくるもんだ。気長にいこう。勿論一応勧誘もするがね。

「流石姉上、言ったことが全部合つてら。それにあんたの事も、嘘を言ってる目じゃないから本当に迷っただけみたいだし……でも何者だあんた？あれだけの傷を治して能力を上げるなんて馬鹿げた力を持つやつなんて、生まれてこの方四十年聞いたことないぞ？」

「そうですね。私も羽が薬にも毒にもなる鳥の妖怪は知っています
が、このように即座に治療出来る妖怪は聞いたことはありません」

四つん這いから胡座をかいて座り、真面目に聞いてくる二人。まあ普通に考えて生物学的にも物理的にもおかしいからな、この力。聞いてくるのも当然か……というかこいつら四十歳なのか。会うやつ会うやつ皆俺より若いってどうよ？前世と合わせればもう六十過ぎだぞ俺。そういえば最近原作知識が無くなってきたなあ……実際にこの世界に生きてるし、時代が全く違うからってのもあるんだろうけども。

「そうさなあ……あの治療術については詳しくはわからん。わかつてるのは腕の一本や二本なら即座にくつつくし、傷も頭が潰れてなきや大抵何とかなる。そして俺より格が低いやつは能力の底上げが起きる。いろいろとな……あ、それと俺の名前はスサノオ。よろしくな」

「えっ……！？」

「なんとまあ、桁外れなこと……」

葵が目を丸くして、鍊がやれやれ、といった風に頭を振る。そんな反応するなよ……俺だって規格外だと思ってんだから。まああるに越したことはないし、かなり役に立ってくれてるからこれ以上文句は言わない、まず無いが。言ったらハデス様に神罰食らいそうだし。

「ん？姉上、何でそんなに驚いてんだ？あの力は半端無いが、もう体験したからそんなに……」

「違います！あなたはどうせ覚えていないでしょうが、あのスサノオですよ！？」

「どうせって……酷いぞ姉上。そういえばスサノオって……どっかで聞いたような、聞いてないような」

あのスサノオって……スサノオは俺じゃないはずなんだがな。ここまで名前が知られる様なことはした覚えがない。そして鍊よ、要は覚えてないんだろ？顔を背けてそんなこと言っても意味ないぞ。葵が頭を押さえてるじゃないか。

「はあ、聞いた私が馬鹿でした……あなたは勿論御自身の事ですし、ご存知ですよね？」

「すまん、旅に出る前はずっと山にいたから知らない」

「……はあ。まあスサノオ様はしょうがないですか」

そう言いながら鍊と同じやつを見るように見ないでくれ！しょうがないだろ！五十年もあの山にいて、出てくるやつら皆喧嘩売って来るんだから！

「いいですか？御自分の事ですし、よく知っておいて下さいね？まず――」

聞いてみれば、心当たりがバリバリある話がほとんどだった。普通の山をたかだか十数年で霊山化させたこと、そのめっちゃめっちゃ強い生き物を従えていること、最近でかくなつたスサノオを間近で見た現地の村人達が助けられていること、それにより六角牛王・スサノオ信仰が現地の人間により行われている等々……動物達は従えているわけじゃないんだが。それに助けた村って最初に立ち寄った村だろう。しかも最初に全身スサノオ化したの見られてたのか。更にはスサノオ信仰とか、俺は妖怪ですよ？

しかも葵曰く、入って生きて帰ってきた者が妖怪人間どちらもないとか。うむうむ、動物達頑張ってくれてるのだな。それにしても……六角牛王って本物が言われてた名前なんだが。まあこっちで現

存しているのは俺だけだ。気にする必要もないだろう。

「ざっとこんな感じですね。特に私達若い妖怪には広く知られています。最近スサノオ様はここ周辺の妖怪達を相手にしていたでしょう?」

「ああ。向こうが問答無用で襲ってくるからな。正当防衛ついでに軽く揉んでおいた」

これくらいのレベルならどれだけ力を抑えれば大丈夫なのかとかが最近分かるくらいに馴れました。この短期間で小型も合わせて軽く数百の妖怪共を相手にしてきたから将来のためにも殺しはしないが、いいストレス解消になったと思う。今日の二人には久々に少しは骨のある奴らでテンション上がったからちよつちミスったが……。

「それです。その際に全ての彼らに短時間で効率よく徹底的に鍛えていたのでしょうか? 強制的ですが。それであなたは『気持ち強く思うのはいいが、驕ってはいかん。このままではこの先、俺相手ではなくとも死ぬのは確実だ。現にやられたお前たちは弱いからな? だがお前たちを死なせるのは実に惜しい……故に、鍛えてやろう。それでもまだ強く、本当の意味で強くなりたいなら俺と来い。戦う力がないやつなら俺が守ろう、俺の後ろに続け。俺は都に行く。どうするかは自由意志だ。来たいなら俺に続け、俺は先に行く』と、おっしゃって去って行ったそうですね。私、感服いたしました」

「ああ……」

胡坐をかいたまま頭を押さえる。ぶっちゃけこんな恥ずいセリフが言えたのは、一週間も迷って頭が沸いていたからなんだ……百鬼夜行を作るのも頭に入れてはいたから勧誘はしたが、最優先事項としてここからの脱出があつたからな。しかも言った後に皆気絶したからなんか恥ずくなつて逃げたなんて、このキラキラした目をしている葵の前で言えない……寧ろ言える奴が見てみたい。というかどこら辺に感服したのかさっぱりわからんが。

「あなたほどの強者でありながら彼らのような若く、未だ弱き者を自ら進んで鍛え上げ、守ろうとするその度量！未だ五十と若くしてそこまでの大きな畏を持ち、しかも攻撃してきた者達であるにも関わらず、力なき者達まで自らの畏に加えるその器の大きさ！更には人間までも「ああ、姉上。止めれ止めれ」……なんですか錬。せつかく人が語っているというのに」

「長いんだよお、話すのが。それに、ようやく思い出したわ。毎回面倒で聞き流してたし、鳩尾が痛くてすっかり頭から離れてた。そういえばスサノオつてば姉上がいつつも里の奴ら使つて情報集めさせてた奴だったなあ……俺にやああの時里一番の実力者の姉上が何でそんなやつにと理解できんかったが、尊敬してるとか、私が仕えるべきはこの方だー、とか言ってたっけか？」

「ほう……？本当か？」

「……はい。あなた様の下でなら、私の力を存分に扱えると判断いたしました。先程述べたように最近の行動を見、そしてあなた様の力を身をもって感じた今、その気持ちはより一層強くなっております……是非とも私めをあなた様の畏の末席に加えていただきたく」

「俺も行くぜ？あんたと行けば強くなれそうだし、なによりこつから何か面白いことが起きそうな匂いがプンプンしやがるからな？」

最初はちよつとばかり顔が引きつった葵だったが、膝についてすぐに開き直ったともとれるように冷静に、淡々と、だが決意の固まった自分の思いを俺にぶつけてきた。鍊も同じようにしている。正直こちらの方がいきなりのことに面をくらっていたのは言うまでもないだろう。まさか俺が勧誘する前に言われるとは……それに葵はたぶんこの先のことだろう里で一番の実力者とか。俺をそこまで買ってくれるのは嬉しいが、それにしてもどんだけ俺の事調べ上げてんだ？でもまあ……これで俺の百鬼の第一歩が出来たわけか。とりあえず、素直に嬉しい。

「くくくつ……安心しろ、元よりそのつもりだ。しかもだ、喜べ？お前たちが記念すべき俺の最初の百鬼だ。今は杯がないからどうにもならんが、用意出来次第すぐに杯を交わそう」

「は、はいっ！ありがとうございます！」

「声が裏返ってるぞぉ〜姉上？まっ、気持ちにはわからんでもないがね。俺は二番目ということでしょうしく頼むぜ旦那？」

記念すべき第一歩目。俺は今日この時、最初の仲間を手に入れた。杯、早いとこどこかで手に入らないかな？

第九話（後書き）

はい！最初の百鬼夜行は鴉天狗でした！雪女達だと思っていたそのあなたっ！……作者もぶっちゃけこうなるとは思ってたです（笑）ちなみにスサノオは雪女達がこっちに来ている事を知りません。

さて次回はようやく雷斬刀の脈動の秘密が明らかに！？

第十話

あれから少し時間が経ち、夜は妖怪の時間ということで先導を葵に任せてその里とやらに進んでいた。その際二人は人型になっている。葵は揉み上げが長い黒の短髪で、キリツとした顔をしているお姉さん系。眼鏡かけて秘書みたいな格好したら似合いそう、なんて思ってみたり。そして鍊は背中辺りまである黒髪をポニーテールにしており、少し垂れ目のイケメン。人型になったのはなんでも夜は鳥目がまだあつてキツイとか……これはあと十年位したら取れるそうだが、鳥目だったのか。

そして、ドンドン進むにつれて雷斬刀の脈動が益々強くなっているのが目に見えてわかる。本当に、何なんだろうな？もし先程にも考えた共鳴という勝手な持論が当てはまるなら……これは今後無視できない反応になるが。

「旦那あ、その刀何なんだ？俺達の鬼發もそいつで断ち切られたし、見た目もさることながらずっとドクンドクンいつてるじゃないか」

「ああ、こいつは俺の相棒の雷斬刀だ。文字通り雷を纏う事に加え、素早さを上げることができる。使用者の妖力を吸ってな。まあ所謂妖刀ってやつだ。ちなみに俺にしか使えんから期待するなよ？」

「なんとも反則臭いこって……」

ジト目で横に並ぶ鍊に睨まれる。そんな顔をされても俺にはどうしようもないんだから知らねえよ。しかしこいつもまだ発展途上とか言ったらどうなんだろうな？

「スサノ才様、着きましたよ」

「ん？おお、そうか。案内ご苦労さん」

話ながら歩いていれば思ったより近かったみたいで葵が立ち止まり、振り返った。それに劳いの意味を込めて頭をポンポンと撫でると、葵の顔が赤くなる。案外初な所もあるんだなあ……なんとも可愛らしい事で。

「はっ……」

「ハハハッ！姉上え！言葉と違って顔真っ赤「っ！」だぶえっ！」

からかう鍊に綺麗に決まる葵の見事なボディブロー。しかもまた鳩尾で、鍊の身体がくの字に折れていた。こうなるってわかるだろうに……。とりあえず再び四つん這いになった鍊を一瞥してから目の前の二人の里に目を向ける。

「ほう……これは中々」

「気に入って頂けて何よりです」

目の前には簡易的だが今の時代にしては見事な造りのわりと大きな木造の門、櫓も兼ねているようで見張りの鴉天狗がいた。そしてその門からグルツと里を囲むように広がっている木の柵。上も尖っているから今の時代では、侵入者避けには最適だろう。今はまだその門の前だが、パツと見中は活気づいていて色んな妖怪がいた。

「里って言ったから鴉天狗だけだと思ったんだが、違ふみたいだな？」

「はい。ここは里と言ってもここ一帯の妖怪達の溜まり場の様な場所です。ここで商売をしている者も少なくなく、例えば化け猫や猫又等は飯屋を開いていたりしてますね」

スラスラと説明してくれる葵に感謝しつつ、なら何であの時俺は攻撃されたんだ？と考えてしまう。すると葵がそれを読んだのか説明を始めた。

「ですが同時にここに面識の無い者を入れるのは危険なのですよ。皆と協力しあい、なんとかここまでの規模に大きくする事が出来ましたが、里の商売をしている妖怪達は基本的に戦闘能力の低い者達

が大半なのです。なのでこのように防護を強化したり、私達力のあ
る妖怪で警備をしているのですが……」

「……何かいるのか？」

「はい。その者達のせいで些か余裕が無かったもので」

攻撃したのは切羽詰まったというのもあるんだろう。その状況で
その敵でもないし、見たこともないやつが来たらまあそうなるか。
俺じゃなかったら死んでただろうがね。

「いや、それなら仕方がない………そいつらは何者だ？お前達を苦戦
させるなら余程だろう？」

頭を下げる葵にそう言って、考えてしまう。こいつらは今まで会っ
たここいらの奴らならある程度の数は何とかなるはずだ。他の戦力
は知らないが、それをここまで疲弊となるとよっぽどか？

「ここを襲ってくるのは、若い旧鼠を中心にした妖怪共です。恐ら
く最近妖怪達が一気に増えてきたのにも関係しているんでしょう。
その中で彼らは十年も経っていない者が大半であり、元来の小型の
鼠の姿のまま来る者、我が里の薙刀を持っている者までいます。
この利権を取ろうとしているようです……」

「それに、単体ならどうってことねえんだが……倒しても倒しても、数があり得ねえ位いるんだわ。里の防衛を行いながらじゃあ、質で勝てても数の暴力にはちとどうしても綻びがでる。御神刀の結界でなんとか凌げてるってのが現状さ」

旧鼠中心とか……話からするにこの山々に元から居ついていたやつらなんだろうが、おかしいな。旧鼠なんぞ弱い奴を中心にしてそんな簡単に増え続けるものだろうか？それとも鼠本来の異常なまでの繁殖力で身内を増やしているのか？実際に見てないから何とも言えんが。裏切り者もいるようだしな。それにしても

「御神刀？」

「ああ、そういえば言ってなかったな？うちの里には昔から、つてか俺達のご先祖がこの土地に流れてきた当初からそこにあったとされる武器だ。里はそれを中心にして広がっていて、そのこの土地に敵意の持つ者に攻撃してくれる力のお陰で里は守られてきた。でもそれを未だに抜く事はおろか、大人一人分以上近寄る事も出来ないんだがな」

「ふむ……」

鍊の言葉にしばし考え込む。敵意を持つ者ということは、選別できる結果みたいなもんなんだろう。もしかするともしかするかもしれない

ないと淡い期待が出てくるが、まあ考えていても仕方がない。行動あるのみだ。

「まあなんにせよ、行くのでしょうか。中に入らないと話にならん」

「そうですね。では行きましょうか」

再び葵を先頭に歩き出す。門番の鴉天狗に何か聞かれていたが、葵が何かしら言っていたので大丈夫だろう。そして中に入ればなんとまあ物凄く活気づいている。飯屋から博徒までいろんな店が揃っていた。売り子とかは猫系の妖怪が多い。ちなみに当たり前だが雷斬刀は消している。

「いらつしゃいませえ〜!」

「おっ!そこのかっこいいお兄さん!うちで飯食ってけよ!」

見事なまでの客引きの声や妖怪達の楽しそうな声があたりに響く。声をかけられた店を覗くと猫又等の従業員の妖怪が忙しそうに動き回り、料理の良い匂いが立ち込めていた。飯でも食うかなあ?

「スサノ才様、まずは長の元へ。里に面識の無い者を入れた時はそういう決まりですのぞ」

「ああ、わかった。おい！後で来るから酒と飯出して席空けとけよ！」

「了解です！ご予約入りましたあ！」

葵に返事をしてからさっきの店に顔を突っ込んで予約を入れとく。それを聞いて店内の化け猫従業員が店の奥に入って行った。出来れば酒とかもらって早いとここいつらと盃かわしたいし。

「流石だ旦那！俺も飲みたいからさっさと長と会ってちゃちゃっと終わらしてくれ！」

「おう、任しとけ。俺も腹ごしらえしたいからな」

「はあ……」

葵がため息をついて歩き出す。しょうがないじゃないかこんな皆楽しそうにしてんだから。それにこんなに近場で良い匂いがすると我慢できないしな……鍊は店の女の子に目が行っていたが。そんな鍊に聞けば里の中心部分で御神刀の近くにあるとか。挨拶とこいつら連れてく事を言った後にそこ行くか……飯はそのあとだ。

しばらく周りの店を見ながら歩き、長の元へ到着。ここは他の家とは違って一回り大きい。葵に連れていかれるままにその中に入る。横に祠の様なものがあるが……まあ時間はある。後だ。

「失礼します」

「おお……入りなさい」

中に入り、使用人みたいな猫又に影でヒソヒソ話をされるのを耐えながら奥の部屋に進む。そして葵がその襖を開けると、そこには背中が丸まっている年老いた猫又がいた。

「ほっほっほ、お主が六角牛王のスサノオじゃな？」

目の前に胡座をかいて座るといきなり俺を言い当てた猫又のじいさ

ん。何故わかった？

「……お初にお目にかかる。六角牛王スサノオ、少しの間この里に滞在する許可を頂きに参上致しました」

「ふむ……何故知っているのかは聞かれぬのか？」

向こうのが今は立場が上なのでとりあえず敬語で話す。ぶっちゃけ面倒だが、挨拶は大事だし。初めだけだけど。

「そちらが何かしら知っていたとしても、私に不利は有りませぬ故」

このじいさんがどうやって知ったかは知らないが、知られたらマズイ情報もこの短期間で出るわけ無いし、そもそも無い。それに葵にあそこまで調べられてたんだから気にもならないからな。

「ほっほっほ、不利はない、か……そりゃそうじゃの。試すような事をして悪かった。僕は戦闘は出来ぬが、ちよいとばかし鼻が利くでな？まあこちらも噂と葵が延々語っていた事を知っておるだけじやがの」

「お、長！」

「なに、本当の事じゃろうが」

俺の斜め後ろで露骨に恥ずかしそうにしている葵をからかう様に言い出すじいさん。長が猫又か……どうりでその数が多い訳だ。鴉天狗とかは昔からの協力関係ということなのか？

「まあ滞在は許可するとして、他に何かあるのか？」

「ああ……この二人、俺が連れていく。我が百鬼夜行の最初の一步だ。盃はまだだが、本人の許可も得ている。その報告だ」

ここはしつかりはつきりと言う。反論は許すつもりはない。というか本人から言ってきたんだからな。じいさんはいきなりの事で目を見開いたが、知るか……っと、合わせて六十年も生きてれば人間の時と違つて遠慮が無くなつたなあ。

「それは……本当かの？」

「はい。以前から申ししていた通り、私はこの方の畏の下に行きます。出会い、戦つてその気持ちはいや増すばかり」

「俺もだ。旦那についてけば俺は強くなれるし、何よりこの人の器

に惚れちまったんだ。生まれ育った里をほおって離れるのはちとアシだな」

「う、うむう……そこまでか」

恐る恐る、といった感じにじいさんが聞けば俺に言ったのと同じような言葉が返ってくる。じいさんからすれば、この旧鼠が敵対している状況下で里一番のとそれに次ぐ実力者が抜けるのは素直に頷けるもんじゃないんだろう。現に先程まで葵をからかっていた余裕が無くなっている。

「しかしのう……前までなら即座に頷いておったが、今お主らが抜けるのはちと厳しいものがあるでう。スサノ才殿には悪いが、この里の長としては素直に頷けぬ」

「……ふむ。なら奴らを何とかすれば、文句はないと?」

「う、うむ。要は里に警備が最低限で良くなれば良いんじゃないかな……じゃが、出来るのか?」

「ああ」

もう既に薄れてきた原作知識で中心たる旧鼠について思い出しても、

今の俺なら普通に細切れに出来る。全体力バーはでくなればなんとかなるし、討ち漏らしは鴉天狗や戦える奴に頼めばいい。」

「葵、そいつらは纏まって来やがるのか？」

「はい。何度かの波状攻撃と奇襲も仕掛けてきますね。あと潜伏、もしくは内から手引きしている者が居る可能性も捨てきれません」

「潜伏してる旧鼠は俺が見つけよう。他の手引きをしている奴らは任せる。俺はここに詳しくないからな。それで、その最中に攻撃してきた場合は俺が前線で潰す」

「はっ」

「りょーかい」

返事をする二人に頷き、再びじいさんを見やる。俺がドンドン決めていくから呆気にとられているみたいだ。でもまあ、ここまではなんだから葵と錬の事はこれ以上特に何も言わないだろう。

「この一件、引き受けた。襲撃の際、里の戦闘員には里の民を守るように言っておけ。いいな？」

「う、うむ。わかったぞい」

「では、これで失礼する」

半ば強引になったが、俺はその場から立ち上がる。それを見て葵と鍊も立ち上がって襖を開けてくれたのでそれをくぐって部屋を出た。

「なんとも強引というか、豪気というか……じゃが大丈夫じゃと安心してしまうのは、何故かのう」

部屋を出た後にじいさんがこんな事を呟いていたらしいが、俺には知るよしもなかった。

第十話（後書き）

実は長と話すときに六角牛山の動物達に使った癒し妖氣を使っていたスサノオでした（笑）本文中では特に説明してませんが、これは本人もほぼ無意識に垂れ流してゐる所謂オーラみたいな感じで、何故か生き物を安心させる力です。特に動物達や動物系の妖怪には効果が高いです。

スサノオの妖氣は万能なんじゃないかと感じる今日この頃（笑）

第十一話

あのじいさんとの対話を終えて、またもやヒソヒソ話をされるのに耐えながら屋敷を出た俺達。地味にダメージが……。

「はぁ……」

「ん？どうしたよ旦那？」

思わず出てしまったため息に鍊が心配してくれるが、なんでもないと返す。すると鍊はふーんと納得して前を向いた。

「さてと、葵、鍊。飯屋に行く前に御神刀の祠に行くぞ」

「御神刀ですか？何故そこに？」

「そうだぜえ、入っても弾き返されるのがオチだし早く飯屋行こ
うや旦那」

祠の見えるところで止まり、鍊の言葉を見ながら祠を見る。ついでに雷斬刀を出してみれば、ものっそい勢いで共鳴してた。それはもう葵が引くくらい。

「こ、これは何ですかスサノ才様？」

「ん？まあ行けばわかるさ。多分」

顔がひきつつてる葵に答え、俺は祠へと向かう。中は暗い洞窟で、松明がそこらにあるがやはり暗い。近づけば近づくほど雷斬刀が共鳴し、今度は青白く光だして刃がキンキン鳴り出した。軽く怪現象だわ。

「これが、私達の里の御神刀です……スサノ才様？」

「おいおい……こんな所にあつたのかよ」

祠の最深部にたどり着き、その前で葵が言う。だが俺は目の前の物に対しての驚きと予想が当たった事への驚きの相乗作用でそれを聞き取ることは出来なかった。だってさ？

「……疾風刀」

「え？」

台座の様な物に刺さっている疾風刀を見て、自然と口が動く。目の前のこいつは薙刀を刃の向きを逆にくつつけたような形状をしており、金と黄緑の装飾がしてある。長さは俺の身長より少し短い程度だ。とりあえず、抜くか。

「スサノ才様！御神刀に近づいては！」

「旦那！」

「大丈夫だつての。お前らの大将を信じろ」

俺はそんな二人に苦笑ながら雷斬刀を消して、疾風刀に近づく。その刃に薄く風を纏っているのがちよつとカッコイイと思いつつながらっ！

「あだっ！」

「スサノ才様！？」

「大丈夫かよ旦那！？」

最後に鍊の言っていた大人一人分のゾーンに入ると、その纏ってい

る風で頭をどつかれた。でも言っていた様に吹き飛ばされはしない。これは……ちよつと怒ってる？

「んな怒るなつて。俺だつて準備とかあつたんだからさ。でもまあ……遅くなつて悪かつたな」

——キイイイン……

とにかく謝りながらその真ん中の持ち手を持つ。すると刃が一度高らかに鳴つてから薄黄緑の風が俺を包んだ。ん？力が上がったような？

「……まあいいか。これからよろしくな、白風」

ズツと力を入れて、なんとなく玉の時の名を呼びながら疾風刀を抜く。下にあつた刀身は長いこと土の中にあつたわりにかなり綺麗な状態だ。風で吹き飛ばしたのか？

「……ん？どした？」

俺が力を入れて握つたりして感触を確かめていると、後ろの二人が口を開いて啞然としているのが目に入る。まあ抜けないって言つてた里の御神刀が軽くどつかれただけで抜けたんだからこうなるか。

「ス、スサノ才様……本当に抜いてしまったのですね」

「ぷっ、アツハツハツハ！ご先祖が誰も抜けなかった御神刀を簡単に抜くなんざ、何処までも規格外だな旦那あ！」

葵は未だ驚いたままで、鍊は腹を抱えて笑いながらそう言ってくる。ぶっちゃけて言えばハデス様がただ昔からこの地に置いたか知らないが、鬼武者シリーズは俺のオーダーメイドみたいなもんだしな。

「俺はな、こういう武器を集める為にも旅をしてるんだ。これは俺専用武器になるわけだが……ま、今の第一目標は京に行くことだな？」

「へえ……あれ？旦那、ここに何かあるぜ？」

疾風刀を首の後ろに回して担いで話していると、さっきまで刺さっていた所から鍊が声をかけてくる。ってか話聞けよ。

「こら鍊！勝手に弄るんじゃないやありません！」

「大丈夫だって。それに旦那に渡すだけって、こいつは……何だ？
手紙と、？」

ガサゴソとそこを探りだす鍊に葵は怒るが、止める間もなく鍊は穴を探りだし、それを手にとった。背を向けてて翼で見えないが、手紙？

「鍊、貸してみろ」

「りよーかい。でも旦那、これ何だ？」

「……はあ」

振り向いた鍊が持っているのはいつか見た手紙と、何故かハープ。両方受け取るが……ホント、なんでさ？

『よ！これを見てるって事は何とか無事に頑張ってるって事だよな？
つつつても、冥界で見てるんだがな！。』

で、ここに手紙を置いたのは言うまでもない。そのハープの事だ。何となくまた倉庫を漁ってたら出てきてなあ。俺使わないし、DOD関連でやるよ、イウヴァルトのハープ。鬼武者シリーズと同じで念じれば出し入れ出来る。それにこの手紙を読み終えたら使い方と

ゲームの時の歌詩と他にいくつか歌がわかるから、心配すんな。

それと、お前が疾風刀抜いたせいでめっちゃ微弱だけどこを守っていた結界が無くなった。代わりと一っちやなんだが、お前の牙が角に妖気を込めてへし折って突き刺せ。その土地が込めた妖気に応じて遠野の畏みたいになるからさ（笑）いろいろ弄くれるようにしたから試してみ？角とかは治癒術で回復出来るから問題なしだ。

P・S・二回目だが、この手紙は読み終えたら燃えるから。頑張れよ！

親愛なるハデス様より』

手紙を最後まで読むと、書いてある通りに手紙が燃えていく。そしてハープの知識が頭に入り込んできた。ハデス様……やっぱりあなたは最高だった！

「スサノオ様？これはいつたい……」

心の中で崇めていると、心配そうな葵の顔が目の前に。俺は疾風刀を消してハープを見せながら、大体の事を二人に説明した。まあハープの所有権を頂いたということだが。

「ふむ、ではそのはーぷと言うものは楽器だったのですか」

「ああ。ま、近いうちに披露してやるよ」

「そりゃあ楽しみだ」

少し笑いながら言う鍊。俺はハープを消して、里を守るために結界を……ん？感じたことのある妖気が少し遠くに……ああ、ハハッ。こりゃ驚いた！

「……葵、里の警備の者に伝える。今こちらに向かってきている奴等は敵ではないとな」

「はつ。後で説明して頂きますよ？」

俺が急に真面目な顔になったので、特に何も聞かずに翼を広げて祠を飛び出す葵。説明せずともまず動いてくれるのは、いいねえ。まあしつかり後で説明するが。

「旦那、どうしたんだ？」

残った鍊が真剣な顔で俺に聞いてくる。実際敵じゃないと思うので

そんな警戒する事じゃないんだが、俺が行かないとまずダメだな。結果は後でも出来る。敵が攻めてきたらその時はその時だ。

「いや、感じたことのある妖気がしてな。俺を追ってきたんだろうが……多分大丈夫なはずだ。まっ、行くぞ鍊。葵が抑えておくのも限界があるだろ」

「よくわからねえけど……旦那がいいならいいか」

カラカラ笑う俺に毒気を抜かれたのか、それから今日の飯について話ながら急ぎ足で感じた方の門に向かう。一応疾風刀を出して。

S i d e 葵

「止まりなさい。ここは我らの里。これ以上進むのは許しません」

スサノ才様に言われてすぐさま移動した私は、周辺の警備の妖怪に話をつける事に成功しました。しかしそれで一息つく事は許されず、今ここにはどこから来たのか——全員ボロボロですが——50を超える妖怪達が溢れています。

ざっと見てこちら周辺の若い妖怪達よりは強いと見受けられる者達と戦えない者達とで半々です。しかも最前列にいる雪女と鬼はその中でも別格で、この群れの頭ではないかというのがこの警備が小声で話をした結果です。

私と錬と同程度でしょうか……スサノ才様を疑う気は全くありませんが、仮にここをその戦力で攻められた場合、下手をすれば里は駄目になるでしょう。私とてどうなるかわかりません。とりあえず、スサノ才様の来るまでは待機ですね。

「なあ。確かにここだよな？」

「ああ。あの人はここに……はずだ」

頭を思考の海から引き戻すと、何やら妖怪達が口々に話しています。あの人は誰でしょうか。等と考えていると、雪女がこちらに近づいてきて……匂いを嗅がれました。

「……あなた。スサノオの匂いがするわね」

「おお、確かにあの方の妖気がまだ残っているな。匂いまではわからんが……」

「「「なにー！？」「」」

いきなり匂いを嗅がれた上に一斉に妖怪達がこちらを見てきます。思わず飛び退いて身構えてしまいました……スサノオ様を知っている？しかもこの女、呼び捨て？

「……何故、そうだと？」

警戒と若干の怒りを込めながら雪女を睨みます。すると雪女は口許を少し汚れた着物の裾で隠してクスクス笑い出しました。薙刀に力を込めた私は悪くないと思います。

「ふふつ、当たり前じゃない。惚れた男の匂いと妖気を、私が間違えるはずがないもの」

ほ、惚れた？スサノオ様……雪女に惚れられるとか何をなさったのですか？凍らされてお持ち帰りされるだけですよ……。

「お？やっぱりお前らだったか……にしてもボロボロだな？」

「スサノオー！」

「おっと」

「だ、旦那……速すぎ。この、短距離を、飛んでも追い付けないとか、どんだけさ……」

私の情報網には無かった情報に呆れていると、その張本人が何故か御神刀を手に苦笑しながらやって来て、すごい早さで雪女に抱きつかれます。鍊は肩で息をしてこちらに来ました。我が弟ながら情けない。

「もうっ、あなたを探すためにこの一週間どんなに大変だったか……」

「ガハハハ！確かに。当初の仲間は減ったが、お陰でいい経験が積めた」

スサノオ様が受け止めた雪女がむくれ、鬼がくぐもった声で笑いま

す。鬼が言うことを信じれば、彼らはスサノオ様を追うためにずつと戦って来たんだろうか？いや、そうでなければこのボロボロの姿に説明が付きませんね。

「そうか。で？俺に何の用だ？山を越えてまでついてきたんだ。よっぽどだろう？」

そも何も知らないという態度を取りながら聞くスサノオ様。口許がニヤついてますから、わかってて聞いてるんでしょうが。

「おおよ！理由は各々それぞれあるが……俺達を、あんたの百鬼に入れてくれ！皆同様にあんたの畏に惚れたんだ！頼む！」

周りの妖怪達がボロボロの身体を推してまで頭を下げます。雪女もこの時ばかりは離れました。他の警備の者はいきなりでついていけないが、驚いているようです。御神刀も持ってますしね。そしてそれに対する我らの主の答えは勿論。

「ハハッ！そうか！ついてきてくれるか！嬉しいねえ……」

「じゃ、じゃあ！」

「ああ。盃を交わそう。まっ、僅差で早かった葵達がまだだからそ

の後になるかな？」

「う、うおおおお！！」

その後しばらく、小鬼や九十九神等の妖怪達が嬉しそうにはしゃぎ回りました。スサノオ様、一日で50を超える妖怪と盃を交わすのですね……流石です！

第十一話（後書き）

なんだか最後無理矢理感が否めません……でもとりあえずこれで雪女達と合流です。彼女達がボロボロの理由は次回で。

まあ大体の予想はついてるでしょうが。

第十二話（前書き）

最近テストとかばっかで遅れがちです……受験生はこんなに大変だったのか。

第十二話

「大将、何するつもりだ？」

「ん？」

百鬼を増やす事に成功し、ルンルン気分でそろそろと祠に戻った俺は一步後ろを歩く見た目は鬼武者ボスの轟鬼ゴウキに話しかけられる。

道中で簡単な自己紹介は終えており、俺の腕にくっついて葵から睨まれてる雪女は氷華ヒョウカと言った。ちなみに皆には治療を済ませてある。何故か服まで治ったのは不思議でならない。仕様か？

だが前回の様に一気に格が上がるということではなく、治療だけだった。まあサービスが何回も続いちやハデス様も見てて面白くないだろうからな。それにそれがあると努力することが無くなってしまう。

「ここはいろいろと襲撃にあってるみたいだからな。それに葵と鍊の故郷だ。故に、ちよいと結界を張ろうかと思ってな」

「結界？」

ハデス様の手紙に書いてあったことだが、俺の角を使うと原作の遠野ばりの畏の結界が張れる事を伝えたと、右腕にくっついてる雪女が小首を傾げる。可愛いが、右腕が冷たいです。

「ああ。俺の角を媒体にして畏で覆い、ここら一帯を囲む。むやみに人間や里に害ある者を通さないためにな」

「スサノ才様……ありがとうございます」

「そんなことまで出来るのかよ大将……」

「流石スサノ才、やることが一々規格外ね」

葵が頭を下げるのをポンポンと頭を軽く叩いて上げさせ、轟鬼が驚いてるのを面倒なのでスルー。氷華よ……褒めてるのか貶してるのかわからんぞ？

「まあ今まで疾風刀がやってきた事を肩代わりして強化するだけだ。五、六百年は保つだろ。そんなときにはまた変えに来れば良い」

流石の俺でも永久的に保てる結界は作れない。そこら辺は歴史的建

造物や大仏とかを修復するのと同じで、時折直す必要がある。妖怪であり、一応不老の俺はその頃も元気でやってるだろうから結界を張り直すのも大丈夫なはずだ。

「総大将、ここがその祠ですかい？」

「ああ。ちょうど里の中心だからな。やり易いんだよ」

「ほこらかあ」

「ただのどつくつじゃね？」

トコトコと前に来た九十九神や小鬼が聞いてくるのに笑顔で返して俺は中に進む。舌足らずなのはまだ妖怪に成り立てだったり、とても弱い者や、子供の妖怪だからだ。子供の妖怪もいたのには驚いたが、俺がぶちのめした中にしつかりといたらしい。そういうやつは数は減ってしまったが、氷華達が庇いながら連れてきたとか。うん。なんとも天晴れだ。

「さて、また戻って来た訳だが……どうやんだ旦那？」

そして鍊が言うように中まで進み、再び疾風刀が刺さっていた場所に到着。ここを中心として里は広がってるから上手く出来るはずだ。

「まあ見てろつて。氷華、危ないから離れろ」

「はい」

俺は氷華を腕から離して轟鬼達と同じ位置にまで下がらせ、腕をサノオ化する。そして肩の角を見るが、長さは30cm程度。普通に考えても、見た目的にも足りない。となればでかくするまでのだが、サイズを大きくするのは全身じゃないと無理なのでとりあえず肉体を人間からスサノオに戻す。俺の身体は実際こっちが本物だからな。寧ろ人間の方は化けてると言える。

「なっ！？スサノオ様……ですか？」

「うへえ……こっちが本当の姿ってやつか？」

俺が天井スレスレまで大きさを変えると、葵と鍊を始め後ろの仲間達が驚きの声をあげる。そういえば見せてなかったなあ……氷華と轟鬼とかの最初の山のメンバーはサイズを変えたことに驚いてるみたいだけど。

「まあ、なっ！っ」と

俺はそんな皆をはた目に肩の1mに及ぶ角を折り、疾風刀の刺さっていた場所に突き刺す。それと同時に治癒を終えて角を治し、俺は一気に妖気を込めていく。

漆黒の角に俺のどす黒い妖気がまとわりつき、更に色を黒く、艶やかにしていった。そしてそれに結界の内容をパソコンの様に書き込んでいく。まず第一に害を為すと認識された者は入れないようにして、人間もここら一帯には干渉出来ないようにする。これは頭に流れ込むハデス様の能力説明曰く、人払いの結界だそうだ。これにより里の安全を確保。

次に里の人間が認めた者だけ入れる様にパスを作る。所謂IDみたいなものだが、どうして出来るのかは気にしないでほしい。俺は頭に流れ込む知識を使ってるだけだからな。あとはなんとなく俺の治癒術を応用して術式を書き込み、里の空気を一定の間隔で浄化するようにする。今後人間の技術の進化によって空気は汚れていくからな。ご都合主義万歳！

「ふう……中々骨がおれたな」

俺はそれらの効果を固定して、人間の姿に変わる。サイズも戻した。そして後ろに振り向くと、茫然としている皆さん。まあ驚くのも無理もない。妖怪である俺が結界をはってんだから。

「あー……詳しくは後で教えてやる。とりあえず、飯だ！」

「「「……お、おお！」「」

俺はそんな空気に耐えられず半ばむりやりといった感じに外へ連れ出した。途中で俺の言ったことを理解した轟鬼達

「酒だー！」

「総大将のおごりだー！」

とか騒ぎ立てていたのは言うまでもないだろう。ぶっちゃけおごりって言えるほどもってないんだが……そこは長につけところか。うん。そうしよう。

第十二話（後書き）

とりあえずここまでです。次回はどんちゃん騒ぎと盃でも書こうかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0864n/>

六角一家

2010年10月24日18時19分発行